馭者の秋

三木 卓

集英社

馭者の秋

三木 卓

集英社

駄者の秋

一九八五年 六月二五日 第一刷印刷
一九八五年 七月一〇日 第一刷発行

著者 三木卓

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
〒一〇一 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話 出版部 (〇三) 二三八―二八四二
販売部 (〇三) 二三〇―六一七一
製作課 (〇三) 二三八―二九六四

印刷所 大日本印刷株式会社

定価 一五〇〇円

©T. MIKI, Printed in Japan, 1985

ISBN4-08-772525-1 C0093

著者との了解により検印を廃止いたします。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

駆者の秋

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

1

淳の事故を知らせてきた最初の電話は、若い女の声だった。今日の午後のラグビー試合で起ったことだという。淳はただちに救急車で近くの病院にはこびこまれたけれども、淳のチームの監督は、それほどのことはないと思うといっていました、とその声はいった。

「それほどのことはないって、どういう意味でしょうか」

わたしは思わず訊きかえした。

「淳は、どこがどうなったんですか。頭ですか。それとも首ですか」

「さあ」

女の声は戸惑いをあらわした。

「土けむりがあがって、そのままうごきませんでした。けれども、そこまではよくわかりません」

「土けむりがあがったんですか」

「ええ。でも、だいじょうぶだって、みんないっていました」

「みんなってだれです」

「あの、監督さんのそばにいた人とか」
「ああそうですか」
それ以上訊くのはむだだと思い、電話を切ることにした。若い娘というものは要領を得ないものなのだから、けがをした人間の父親に知らせる役はむかない。ともあれ病院へかけつけてみることだ。そうすればすぐにわかる。
「わざわざどうもありがとう。すぐにぼくも行きます」
「あの……」
ためらいがちな声がいった。そのまま待った。
「あの、とってもこわくて……」
「きっとだいじょうぶですよ。安心なさい」
思わずわたしはそういって、電話を切っていた。
ポケットのなかの財布をたしかめる。部長付の工藤恭子にむかって「ちょっとこどものことで外出してくる。すぐ帰ってくるつもりだが、遅くなりそうになったら電話を入れる」といっているうちに、緊張してきた。いわゆる草ラグビーといわれるようなものであるとはいえ、プレーしている以上、事故もあるかもしれぬ、と思っていたが、それが現実のことになってしまったのである。そのことが圧迫になってわたしを押えつける。オーバーをとりにロッカーの方へあるこうとすると、そこへまた電話が鳴った。その声は監督の月見里ですと名のった。
「ああどうもおそれいります。それでどんな具合です」
送話器をつかみながらいうと、驚いた声で返事がもどってきた。
「ああ、もうごぞんじでしたか。いやどうも申しわけのないことが起りまして、いや、だいじょうぶ

はだいじょうぶですが、とにかく大事をとりまして検査を、ということで入院させたようなわけです。安心していただきたいんです」
「ああそれはどうも。よかった」
わたしは思わずいった。
「とにかくラグビーの事故ですからね。しかしそれなら」
落着いているつもりではあったが、タクシーに乗って一人になると、心配はつのって来た。趣味はラグビーというと人は堂々としたからだをしていると思いがちだが、スポーツをやるにしては、淳はむしろ華奢といった方がいい体軀の持主だった。背は高くて足が早く、器用なところがあるから、フルバックが定位置である。その華奢なフルバックが酒ぶとり中年ぶとりの牡牛のようなフォワードにその日、二度もふっとばされてとうとう失神したのだと月見里はいっていた。わたしは、目をつぶって幾度も月見里の説明した事故の情景を思いうかべた。死ぬようなことにならないでほしい、と念じた。もともとひよわだった子が、それでも喧嘩っぽいスポーツをやるところまでになったのだ。
病院の受付で訊くと、すぐに部屋はわかった。そこは個室で、入っていくと淳のほかはだれもいない。ぼんやりとした表情であおむけになっていて、ぽつんと寝ていた。その表情が、見なれているはずのわたしにも未だ見たことのないものだった。
「おお、どうだ」
声をかけても、表情はすぐには変らなかった。
「ああ、おやじ」
ゆっくりとそれだけいうと、かすかに唇のへりを曲げた。わたしにむかって微笑しているつもりらしい。鼻からほほへかけて、うっすらと血の流れたあとがのこっていた。

「起きあがるとめまいがしやがって、どうもこまるんだ。こんなことって、はじめてで」
淳は天井をみつめながらいった。
「じきよくなるさ」
わたしがいった。
「じきよくなるよ」
淳がいった。しかしその声には淳らしいのびやかさがなかった。あののびやかな感じが淳を明るい若者に見せていたのだったが、今の淳は、こわばっている。不憫だ、という思いがつきあげてきた。幼いころ腎臓をわるくして安静にして横たわっていたときの小さな姿が、今の姿にかさなって思い出されてきた。そんなに、起っている事態に対して従順で無抵抗だった。
主治医に会って挨拶した。医師は髪の薄くなった中年男で、一見些細なことは気にかけない、豪快さを売物にしている人物に見えたが、こと診断や見通しということになると慎重で、深刻な事態とも、楽観的な事態ともとれるようなことをいって決して安心させなかった。ただ、いままでの検査からは、重大な損傷と思われるものは認められないということはたしかで、不安は去らないものの、すぐにどうこうということはなさそうだった。
それから病室の方へもどっていった。その手前に見舞客の控室のような場があって、そこに淳の仲間らしい連中が幾人か詰めていた。椅子とテーブルと灰皿があって、空になった飲みものの缶や煙草の吸いがらが林立している。かれらはさらに濛々たる煙をあげていた。中には若い女も幾人かいて、一つの隅にまとまって、ひそひそと話している。学生風のもいるし、かれらのクラブの事務所をおいているデザイン工房につとめているらしい女性もいる。会釈しながらそこを通りすぎようとすると、一人の部員が声をかけた。

「あ、久能君のお父さんですか」
すると、その声に、若い娘の一人が顔をあげ、その黒目がちな目でわたしをじっとみつめるのがわかった。
「あの、ぼくはキャプテンをやっている石山です。昔、大学の二軍にいたことがあったんで、そういうことにされているんですが。よろしかったら、ちょっとここへおかけになりませんか」
「ああどうも。お世話になります」
わたしはそこへ腰を下し、石山の、事故の状況説明を聞いた。
それは月見里の説明と殆ど同じもので、相手の蹴ったパント攻撃のボールを、フェア・キャッチしようとしてゴール前でやられた、という前半の負傷と、後半、フルバックのライン参加で右隅に淳がトライしたときうけた猛烈な体あたりによる失神とのことだった。
「二度目のとき、イン・ゴールへ落ちたんですけれどね、変なかたちに首がまがったままぶつかったんで、それが気になりました。なにしろ二度目ですからね、すぐに意識はもどったんですが、すこしぼうっとしていましたし」
「なんだかまだ、ぼうっとしているようだった」
「ええ……」
わたしはそのはなしを熱心に聞いていたし、今でも正確にその内容を思い出すことができる。なにしろそれは淳の運命に関することなのだから。だがそれとともにわたしは、石山がわたしの名を呼んだときに、その声を聞いて顔をあげ、わたしをみつめた娘のことがずっと気にかかっていた。
その娘をみとめたのは、ほんの一瞬のことであり、わたしは、すぐに石山の方を向いてかれと会話をはじめていた。けれども、その娘の容姿からうけた強い印象を忘れることはできなかった。そして

そのおどろきは、しだいにわたしのなかに根をおろしていき、やがて堪えられなくなった。わたしは首をまげてもう一度、その娘を見た。

娘は、細い首と四肢のもちぬしだった。太い灰色の毛糸で編んだジャンパーを着、肌いろのぴったりとしたスラックスをつけていたので、脚の細さも首の細さもよけいに強調されてうつった。小柄で、からだつきには幼さがのこっているように思われた。そのもの怯じする様子のない、ひらかれた黒い目はわたしをなおじっとみつめていた。

振り返って見直してみたいという誘惑に堪えているあいだ、わたしは、ここにとつぜん、あの安井由起子が現われたのだと、頭の片隅で思っていた。しかしふりむいて石山から注意を外らし、娘に意識を集中したときには、もちろんもう、それが由起子であるわけがない、というまともな判断力の上に立っていた。由起子がこの娘ぐらいの年齢であったのは今から二十五年以上前のことである。だから、ここにいる娘が、由起子の産んだ子どもであってもおかしくないぐらいの年齢になっているはずであった。

しかし人間というものは、自分が今到達している年齢というピンポイントともいうべき場に自分の意識を統一・限定して生きているわけではない。それまで生きて来た時間のベルトのどの部分にも意識を漂流させることは一応できるので、気づくとそういう状態に入っていることもしばしばである。半醒の状態にあるときなどには、今自分が幾歳であったか年齢を忘れることもあるし、母親のことを思い出して幼児の心になっていることだってある。

だからわたしもまた、その娘の黒目がちな目を見たとき、一挙に由起子と会っていた頃の自分にもどっていて、その状態にすぐには矛盾をおぼえなかったとしてもそれは不思議なことではなかった。わたしはまず、その事態をごく自然にうけいれていた。淳の父親として真剣にその身を案じつつ、も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と大学二軍出身の主将の説明を聞いていたが、同時にわたしは新制度になってからそれほど間のない大学の学生にもなっていて、たとえば、ブルーノ・ワルターが新しく吹きこんだレコードなどを小脇にかかえて、いそいそと友人のもとへ急いでいるという意識でもあったわけだった。そしてまた同時に、まぎれもなく中年になっているわたしは、そういう自分を皮肉なまなざしで眺めてもいた。

しかしふたたび娘を見ることが、今度は目とともに由起子の特徴でもあったその頬のふくらみのかたちをもそこにたしかめることになったとき、わたしは軽いめまいのようなものをおぼえた。それは、天窓からさし入ってくる光のかげんで、こまやかな産毛の白い輪郭として目に入って来たのだったが、わたしには、それは忘れることのない曲率だった。それは水気の多い甘美な果実を思わせるもので、完全に熟せばやがて崩れてくるにはちがいないが、未だそこに到るまでごくわずかな時がある、というはりつめたかたちである。そしてその曲線のうちがわには、なにかは、はっきりとはわからないが他の女にはない豊かなものが潜んでいるにもかかわらず、当人はそのことにすこしも気づいていない、と思わせるようなものだった。

それはわたしのもっとも好きな頬のふくらみだった。そしてとくにそのふくらみの豊かさを失わないような唇のかたちが伴っているとき、その口もとをとても可愛らしいものと感じるのだった。由起子もそのような、いわゆる受け口だったが、この娘もまたそうだった。

だが、そのうつむいている娘には、由起子とはちがうところがあった。それは雀斑である。由起子は肌のいろが白くて、頬骨のあたりに雀斑が淡く散っていたけれども、この娘には認められなかった。ふたたび石山と話をつづけながら、そのことがわずかながらわたしを解き放ってくれていることを知った。

その日、もう一度その娘を見たのは、彼女が他の女ともだちたちと連れだって病院を去っていく時

である。「それでは、またまいりますから」とその中の一人が病室の入口まで出てきたわたしにあいさつをしたとき、その娘は全員の一番うしろに、すこし離れて立っていて、だまったまま頭だけはいっしょに下げたのだった。それは生まれついての慎しい性格のあらわれのようにも思われたが、群れからわずかに距離をとると、かえって目立ってみえることもまた確かなことだった。そして娘は、頭をあげたとき、やはり黒い目をはっきりとひらいてわたしをみつめてから、目を外らせたのである。

長女の郁世がかけつけて来たので、その場をあずけて会社へもどった。淳は死にはしないが、まだ回復してこない淳の無表情を思い出すと、やはり心配だった。単なるショックというだけではなくて、どこかに損傷があるのかもしれない。わたしは会社へもどったものの、そのまま自分の机へもどる気持になれなくて、地下の喫茶店でコーヒーを飲みながらあれこれ、考えてもしかたのないようなことを思った。

淳は来年の三月、商学部を卒業することになっていて、就職の内定先は、Dという都市銀行だった。休暇になれば旅に出るとか、学校の帰りには英会話教室に顔を出してみるが、そうでないときは、バーへも顔を出す、という、まあ平凡な部類に属する学生である。淳のいっている大学は、たまたまラグビーが強くて、淳もときどき秩父宮や国立競技場へ試合を見にいっては、帰りにビールを飲む。そんなことをやっているうちに、なんとなく知りあったもの同士で、同好会のクラブをつくるようになった。まだ、今日までに、幾試合もたたかってはいないはずである。

淳もラグビーをやることに本気になっていたというわけではない。ハイキングに行くとか、スキーにいくとか、ということとあまり区別していなかった。きっと大学とはかなりちがう種類の人間とつきあえることも楽しかったのだろう。

しかし、淳という人間は一般的にいって努力家といっていいだろう。今通っている私立大学も、私

大としてはかなり難しい入学選抜をするところで、淳は高校卒業の年に同じ商学部をうけて失敗したのだが、翌年は苦手の英語を克服して合格したのである。

そして、ものごとに対する洞察力だって決して秀才たちに比べて劣ってはいない。秀れているとはいえないまでも、そこそこにはいっている。それでいてあくまでも外見は温厚であかるかった。わたしはそういう淳を愛していた。

しかし父親から見ると、その舞台裏も見えた。淳は、いっしょうけんめいに自分をとりつくろっている。それでとうとう耐えきれなくなり自制心を失うことが、ごくたまにあって、そのときには、自己放棄がはじまる。幾度かそういうこともあった。そしてわたしはそういう淳も決してきらいではなかった。

いずれにしても淳は平凡な人生の選択をしようとしていた。しっかりとしたところへ就職して家庭をもつ。そして、定年まで働く。そういう幸福は、平凡といってしまえば平凡かもしれないが、しかし一応の内容のともなったものとして成りたたせるとすれば決して楽なことではない。しかし、もし望むならば淳のような人間にはさずかるはずだ、と思っていた。

「あのねえ、おやじ。今すぐじゃなくていいんだがな。そのうち会ってもらいたい人がいるんだ」

あれは、就職の内定した頃のことだったか、われわれが二人きりになったとき、淳がそういったことがあった。やや舌ももつれかげんで、照れくさそうな様子をありありと示していたから、すぐに女ともだちのことだと気づいたが、わたしは何くわぬ顔で「いいよ。いつでも」とだけいっておいた。

それからだいぶたつ。もし、将来を誓いあっているような娘をつれてくるのなら、どこかすこしましな店へでもつれていってうまいものをたっぷりと食べさせてやり、話のわかるやさしい父親を演じたいものだ、と考えていたが、いつとはなしに、そのままになっている。それは淳がなにもいわない

からで、こちらからさいそくするわけにもいかないことだが、わたしにしてみればすこし残念な気さえしていた。
今日見た、あの娘が、その女ともだちなのだろうか。そして淳の事故をまっさきに知らせて来た電話の主も、あの娘ということになるのだろうか。わたしはコーヒーを飲み終るとたちあがった。
かすかな胸さわぎを感じた。

2

今日は月曜日だったので、夜は住子のところで食事をする日である。わたしは、デスクへもどる前に、佐藤紙器工業へ電話して住子を呼びだした。
「あの久能ですけれど——」
「ああ、どうも。どうかしましたか」
低い住子の声がひびいてくる。何ごともなければ電話をしないで直接行く。そういうとりきめになっている。
「いや、実は淳のやつがね、今日の午後——」
手みじかに事故の事情を説明し、今晩行くことができなくなったことをいった。
「ああ、それはたいへんだわ。是非そばにいてあげて下さい。わたしも二、三日うちに顔を出します。

淳くんに頑張るようにいって下さい」
「いっておくよ。とにかくそれでは」
佐藤紙器工業は、住子の父親が会長をしている会社で、彼女はそこで事務をして給料をもらっている。わたしより三つ年長の五十二歳。こういう付合いになってからわたしは金銭的なことは何ひとつしていない。はじめは気になったがそのうちどうでもいいような気持になった。住子の父親が、手もとにひきつけておきたいのである。それを侵すことはない。白髪が多いことが、かえって美しく見える住子のみだしなみのいい姿を思い出しながら電話を切る。それから終業時刻までデスクの仕事をした。
五時半をまわったところで郁世を電話口に呼び出して様子を訊き、変化のないことをたしかめる。郁世は去年学校を卒業してすぐにつとめた定時制の高校で化学を教えているから、これから出勤してもらわなければならない。わずかの遅れでわたしが淳につくことを告げて、せめて三時限の分だけでも授業に行くように説得した。
「今日は、あちら、行かれなくていいんですか」
郁世は、いつもと少しちがう硬い声でそういう。
「馬鹿。何いってるんだ」
思わずわたしはいう。それからしまったと思い、声をやわらげる。
「安心して学校へ行きなさい。だいじょうぶ、うまくいくから」
「心配よ、そんなこといったって。だってたった一人の弟なんですもの」
もう郁世は激して涙声になっている。この子は死んだ母親に似て涙もろすぎる。わたしはそういうところに些か辟易している。涙もろいということを女は自分の感覚の繊細さのあらわれとして誇示す

るところがあるが、わたしには、大きな感情の負荷にたえられない自制力の脆さとしか思われない。しなやかできめの細かい心のうごきとは縁のない、感情の突出である。わたしは郁世のそういうところを心配しているし、住子はさらにおそれている。

「涙が試験管に流れこむと、教室中大爆発になるよ」

わたしは、すすり泣いている声にかぶせておどけていう。

「それとも、ダイヤモンドが出来るかな。弟への想いが結晶して。とにかく、元気だして行ってきなさい。いつでも、しなければならないことは精一杯やる。それが結局一番楽なんだから」

「ええ。三時限の分に出ます。でも、父さん、草ラグビーなんて止めさせればよかったわねえ。家じゃ、だれ一人賛成しなかったんだから。わたしだって、とてもいやだったのに、どうしてもっときついことをいわなかったのかしら」

「ほんとにそうすればよかった」

わたしは慎重にいう。

「じゃあ、あとで」

電話を切ってふたたび淳のもとへ行く支度をする。この年はもうじきあらたまるが、来年の誕生日が来ると郁世は二十五歳になる。父親としてはそろそろ先のことを心配しているつもりだが、郁世は縁談にあまり関心を示しそうにない。恋人がいる、というふうでもないが、だからといってしつこくすると、わたしが自分の都合で彼女を追い出そうとしているようにとられかねないので、さしあたりはなりゆきにまかせている。それに郁世は昼間のうちに家事をこなしておいてくれるので、たしかに楽でもある。

郁世の話では、淳はよくねむっているということだった。主治医の安心した顔を見てから病室へ入

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com